

宮城県の教育格差

宮城県仙台第三高等学校 普通科

要旨

本研究は、現在宮城県で生じている教育格差について、その原因を調査し、改善に寄与できるような汎用性の高い活動を提案するものである。私達は教育格差に対し、学力の根底にある非認知能力の育成という面からアプローチすることの有用性に着目し調査を行った。

1 はじめに

教育は個人の将来を左右する最も重要な要素の一つである。しかし、家庭の経済状況や地域差などによって教育の機会に不平等が生じると、子どもたちは自分の選択によらず将来の可能性が制限され得る。教育格差を改善することで、すべての子どもたちが同じスタートラインに立てる社会の実現に貢献できるのではないだろうか。

また地域によって教育格差の生じる原因、環境、程度は異なることから、教育格差において、画一的な改善策は存在しないといえる。そのため、地域や範囲を絞って改善案を考察する必要がある。さらに、特定の地域の格差を改善することができるるのは、その地域内にある資源が主である。このことから、私達は宮城県という範囲に絞り、宮城県内の資源を利用してことで教育格差の改善に寄与できる活動の提案を目的とした。

2 問題の所在

現在宮城県で生じている課題の一つに、仙台市とそれ以外の地域での学力差というものがある。令和5年度の小学校6年生と中学校3年生を対象にした全国学力調査では、その差が顕著に現れている。仙台市では小6の算数を除いて全国平均を1~4ポイント上回るのに対し、仙台市以外の地域ではすべての教科で全国平均を下回っている。

さらに、宮城県の進学率についての先行研究

がある。

2020年における男女計の進学率をみると、富谷市が78.8%と最も高く、次いで多賀城市(66.9%)、仙台市(61.0%)、角田市(58.9%)、利府町(52.5%)などとなっている。最低は川崎町の5.0%であり、最高の富谷市とでは73.8ポイントの差がある。

男子進学率では、富谷市が88.6%と最も高く、次いで多賀城市(63.7%)、角田市(60.3%)などと続く。最低は川崎町の0.0%となっている。女子進学率では、富谷市が72.6%と最も高く、次いで多賀城市(70.1%)、白石市(69.2%)などと続く。最低は丸森町の5.7%となっている。また、2010年から2020年にかけて市町村の進学率格差は拡大している。

このように、宮城県内の市町村には顕著な学力と進学率の格差が存在する。

3 問題の原因

- ① 私立大学が多く高等教育の私費負担が大きい日本では、家庭の収入が進学率を左右する要因となっている。そのため、所得が高い階層が多い地域ほど、進学率が高まると考えられる。
- ② 進学に有利な条件を持つ層が多く存在することで、進学や学歴の必要性が認識され、そうではない階層の子も進学意欲が上がる傾向がある。そのため、高学歴を有する人々が多い地域ほど、地域全体の進学率も上がると考えられる。
- ③ 地域に学歴が高い親世代が多ければ、学習

塾への需要が高まると考えられる。そして、学習塾の集積度が高いほど、進学率は高まると考えられる。

このことから、教育格差に影響を与える要因としては、①経済的要因、②教育環境要因、③家庭の教育に対する関心などが想定される。

調査1 アンケート

教員向けのアンケートを行い、教員の目には教育格差はどのように写っているのか調査し、実態の把握を試みた。

【アンケート内容】

現状の提示

宮城県の学力調査の結果を提示(2問題の所在で既述)

↓

質問1

上記を踏まえ、その原因として考えられるものを選択してください。

- ①経済力
- ②学校の収容人数と生徒数
- ③家庭の教育に関する関心
- ④その他(記述)

↓

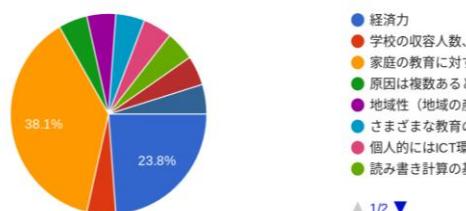
質問2

質問1の理由、また教師という立場で教育格差を目の当たりにした出来事などがあれば教えてください。

【結果】

仙台第三高校の教員21名から得られた回答は以下のとおりである。

上記について、原因として最も影響があると考えられるものを選んでください
21件の回答



「家庭の教育に対する関心」38.1%(8人)

寄せられた意見

- ・親元を離れることへの抵抗感の差
- ・首都圏では小学校からの受験を考える家庭がほとんどで、公立校より私立にという意向が強い。一方宮城県は、高校受験の人がほとんどで小中は地元の学校に通う人が多い。
- ・高校入学における地方拠点校の入試倍率はほぼ1倍で、必死に勉強して高校に入るという危機感が薄くなる

「経済力」23.8%(5人)

寄せられた意見

- ・ICT 機器を購入する余裕がない
- ・仙台に拠点を構えることができる経済力の有無。仙台市は数多くの大学や企業が集まっている、外部と連携した活動、公共施設の利用が行いやすい
- ・学習塾(学校以外の学習環境)に通えるか否か

その他

- ・ICT 環境が各学校で異なっている
- ・様々な教育へのアクセスが異なっていて、それらの要因が複合的に関連して、地域の教育格差が生まれている
- ・同じ年代の比較対象が少ないと危機感を感じる機会が少ない

アンケートより、「家庭の教育に関する関心」が地域間の学力差に大きな影響を及ぼしている可能性が高いと考えられる。また、学校や家庭における経済力によって学習の質、体験の機会に差が生じているという現状も把握できた。ただし、今回のアンケートは仙台第三高校の教員のみを対象に行っているため、一概にこれが原因であると断定することはできない。

調査2 教授訪問

関西大学の若槻健教授を訪問し、格差解消に向けた活動の効果や実例を伺った。内容は以下のとおりである。

①学習支援は有効ではない。支援を必要とするような子どもたちは、学習に対する意欲が低かったり精神的に不安定であることが多いため、学習の機会よりも、話を聞いたり誰かと一緒に過ごしたりすることができる場を作ることが重要。実際に放課後の児童を預かる場を作っている。

②近年「体験格差」が広がっていて、学力とも関連している。幼少期の様々な体験が意欲や関心を養う。家庭の経済力や関心によって体験する機会に差が生じている。実際には中学校、高校見学などを開催している。行楽地で観光、自然体験などの機会も効果的である。

③非認知能力(やる気など測定不可能な能力)を伸ばすことが重視されている。「体験」によって得られるものが多いと考えられている。

非認知能力の重要性を表すものとして、「学力の木」と言われる以下の図がある。



人間の学力は木に例えられ、根、幹、葉に分けられる。樹木は根、幹、葉の間で水分や養分が受け渡しされて育っていく。これが、子どもたちが知識や技能を習得し、自らの生活の中で意欲的に使うことを通じて、思考力や判断力や表現力を育んでいく流れと対応している。

根は、通常は目に見えず地中に隠れているものの、その樹の存在自体を支えるという重要な役割を果たしている。「意欲」「関心」「態度」などはこの根に相当する。1人1人のもつ意欲や関心、生活態度は、点数化することはできないが、

学習の基盤となる重要な学力であり、これこそが非認知能力である。

4 考察と実行

調査1をもとにすると「家庭の教育に対する関心」を高める活動を行うことが有効だと考えられるが、実際に各家庭を対象に支援を行うことは私たち高校生にとって現実的ではない。よって、子どもが普段の生活の中で学力を伸ばせる機会を作ることが望ましいと考えた。

また、調査2を踏まえ、私たちは学習支援をメインにするのではなく、根底にあるやる気、粘り強さ、好奇心といった非認知能力を育むことができる機会を作ることが、子どもたちの学力向上に有効なのではないかと考えた。
実際に行った企画は以下である。

児童館訪問

令和7年3月27日、私たちは鶴ヶ谷児童館へ訪問し、そこに普段から通う小学校児童を対象として非認知能力を高めるとされている「水平思考ゲーム」を行った。

目的は、非認知能力を育むための活動を実施し、その妥当性を調査することである。活動するにあたって、私たちは株式会社 EQAO 教育グループのルーブリックシートをもとに、非認知能力の中で特にどの能力に着目するかを定めた。

着目した観点

- ①主体性
- ②問題解決能力
- ③探求心
- ④協働力
- ⑤自己肯定感
- ⑥コミュニケーション能力

主体性や問題解決能力、探求心という観点から、子どもの興味を刺激することができる推理型のゲームが良いと考えた。

自己肯定感という観点からも、子どもが成功体験を得られるようなものがよいと考えた。

協働力やコミュニケーション能力へのアプローチとしては、異学年との交流や私たち高校生との密接な関わり、グループワークを設けることが有効であると考えられる。

以上のことから私たちが考案したのは、オリジナル版水平思考ゲームである。

ゲーム内容

- ①高校生からお題を出す
- ②児童はグループで話し合い、質問を一個考える
- ※高校生が各グループへ行き、子どもが全員話せるように促す。
- ③グループごとに発表者を決める
- ④順番に発表してもらう
- ⑤高校生が正解を出す



振り返り

以下の評価シートを用いて、活動中の子どもの様子を評価した。全体としてゲームに積極的に参加、発言する姿が見られたが、粘り強く解決に向けて試行錯誤しようとする姿はあまり見られなかった。また異学年もいるグループということで、発言するのにためらいがあるようにも見られた。

		4 (S)	3 (A)	2 (B)
		1日に何度も見られる	1日に数回見られる	ほとんど見られない
主体性	他者からの働きかけを待たずに自ら行動する		○	
	問題の解決や達成に向けて、何らかのアクションを起こしている	○		
問題解決能力	課題解決のために臨機応変かつ適切に対処する	○		
	身近なことに疑問をもつ		○	
コミュニケーション能力	他者の感情を理解、尊重する	○		
	自分の意見を適切なタイミングや方法で表現する	○		
探求心	物事を掘り下げる、見極めようとする意欲が旺盛である	○		
	困難なことにも、根気強く取り組む		○	
	幅広い視野で物事を考える	○		
自己肯定感	物事に対して態度が前向きである	○		
	成功体験がある	○		
	互いに肯定し合う	○		
	努力を継続する			○
	感情をコントロールする			
協働力	異なる学年、立場にある人と助け合う	○		
	異なる学年、立場にある人を尊重する	○		
	異なる学年、立場にある人と共に、目標や目的を達成する	○		

5 まとめ

宮城県では進学率や学力において教育格差が存在し、その主な原因には、「家庭の教育に対する関心」や「経済力」などが挙げられる。一刻も早く格差の拡大を防ぐ必要がある。

格差改善に有効な活動で高校生に行えるものの一つとして、子どもの学力の根底にある非認知能力を高められる機会を平等に与えることがあると考えられる。

実際に行った活動を通じ、子どもたちが非認知能力を駆使する姿が見られたことから、遊びの場でも学習に活きる機会をつくることができるということが示されたと言える。また、地域の子どもたちを地域の資源(高校生)の手によって育てるという形は、他の様々な地域で行える可能性、汎用性の高い活動の実現につながるのではないか。

一方で、活動における評価者が我々だけであったことや、継続的な測定ができておらず非認知能力向上に対する効果が曖昧になってしまったことが反省される。

今後は、非認知能力の測定方法の点で、評価者を多様にすることや継続的に行なうことが必要である。また非認知能力を育成するための具体的なメソッドを確立することが望ましい。このような活動が広まり良いサイクルとなれば、子どものおかれた立場によらず学力をつける基盤を身につけることができると考える。

参考文献

論文 若槻健著 「地域に根ざした生涯学習構想」

<https://www.asahi.com/articles/ASR70747RR70UNHB001.html>

https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/219145/1/sse_017_001.pdf

https://www.77rc.co.jp/article_source/data/newsrelease/files/newsrelease_20221025_2.pdf

abstract

This study examines the causes of the education gap and explores meaningful solutions. Our purpose is to raise public awareness of this issue and propose effective strategies to contribute to it. Through our questionnaire, most teachers think that “a lack of interest in education” is the main reason for the education gap. Additionally, we learned from a professor of Kansai University that developing children’s non-cognitive abilities can be an effective approach. Considering them, we conducted a volunteer activity which may help to develop various abilities at Tsurugaya Children’s Hall. We believe that promoting opportunities for children to raise their non-cognitive abilities is meaningful action to reduce the education gap.